

The Case of the Talking Bug
1955
by The Gordons

目次

盗聴 5

訳者あとがき 256

解説 横井 司 259

主要登場人物

- グレッグ・エヴァンズ……………警部補
- ジョージ・ピアソン……………私立探偵
- ハリー・J・マローン（ブリッツ）……………証券会社社長。マネーロンダリング首謀者
- エドワード・オステン・アンダーソン……………マローンの手下。中古車販売店主
- ザンプ（司祭）……………マローンの手下
- エレン・マーシャル……………マローンの愛人
- ウィリアム・ブラー……………不動産店主
- ジャン・ローガン……………不動産店従業員
- シャロン・ローガン（コーキイ）……………ジャンの妹
- ブラッド・ランカスター……………副本部長。グレッグの上司
- ジヨール・パッカー……………グレッグの同僚
- マクタミッシュ……………ニューズ紙の記者

盜聽

第一章

午後一時五三分、警察の盗聴器がマローンの電話を傍受した——機器は科学技術部の職員の間ではオールド66で通っている——若い女性が、どこの誰ともわからない女性が殺される。九月六日月曜日、満月、大都会には珍しく星が輝く夜。

その夜もグレッグ・エヴァンズはいつものように職場に向かった。午後五時過ぎにステーション・ビルディングから吐き出される秘書たちの群れの間を通り抜ける。彼女たちの香りや笑い声、疲労のにじむ顔に気を取られ、群れから抜けようとする秘書と時折ぶつかる。

オフィスビルの中で、彼は尾行されていないかを振り返って確かめ、電話室に入ってダイヤルを回す。

「ジョージ、着いたぞ」

「オーケー、グレッグ」

エレベーターに乗り九階で降りると、右に曲がり、廊下の突き当たりで左に曲がった。ちょうどその時ドアから出てきた若い女性とぶつかりそうになり、目が合う。

その女性が立ち去ったから一番奥のオフィスの錠にすばやく鍵を差し込む。中に入り、ドアを閉めた。かつては受付室だったが今はがらんとしている。彼は三步進んで次のドアに近づき、違う鍵を錠

に差し込んだ。

中に入るとジョージ・ベンソンが回転椅子に座ってなにやら警戒していた。三八口径のピストルが覗くホルスターが、腰でぎこちなく揺れる。

「やあグレッグ」ジョージが言う。署の科学技術部を制御するより、教授として机に座っているほうが向いていそうな学者肌だ。

「何かあるのかい？」グレッグが再生装置に向かって領きながら尋ねる——機械は二十七台、室内に馬蹄型に並べてあり、それぞれ電話を傍受している——すでに殺人や誘拐やチンピラにまつわる事件が明るみに出ているか、これから出そうな家やオフィスにつながっていて、ひよんなことから犯罪に巻き込まれた善良な市民の生活をも傍受している。

機械がさえずっている——喋る虫、と仲間内では呼んでいる。

「……ああ、あなたペギーを知っているのね、彼女つたらしいも調子よく二、三歳サバを読んで、……ずいぶんうまくやってるわ……」

「……まあ、ジーニー、何してる？」

「……もし彼にまたあんな言い方されたら、ずたずたに切り裂いてやる……マットレスの下に肉切包丁を隠してあって……」

「……ジョー、今日はだめなんだ……女房と子供をショーに連れてかなきゃならない……ああ……」

「……あなた、何時に起きたの、家の時計が止まっていて……」

いまは賑やかな時間だ。夜のこの時間帯には、馬蹄形の中で生活が丸聞こえになる。甘く陽気なものもあれば、衝撃的で猥雑なものもある。

グレッグはジョージのほうを向いた。「さっき言ってたよな……」

「今日の午後、うまい具合に10番を傍受できたんだ」

ナックルズ

10番で盗聴しているのは拳銃マーストンの電話だ。こわもての拳銃マニアの十八歳のチンピラで、ここ五カ月ほど街の北部の住宅地を物騒にしている、十代の不良集団ホワイト・フェンスのボスだ。警察の記録では殺人一件、傷害九件、強盗二十七件を起こしているが、有罪判決はない。

ジョージが傍受記録を報告する。「奴らは今夜、五十七番街とイースト・ランドルフの交差点にあるジョーの酒店を、閉店間際に襲撃するつもりだ」

「録音したのか？」

「ああ——ミス・カボットにテープ起こしを頼んである。強盗課と少年課に声をかけた」

グレッグは鎮くと馬蹄形に置かれた機器の周りを歩き始め、各々の再生装置の横の傍受記録に目を向けた。メープル・スー・バンドを盗聴しているテック8のところでは彼は立ち止まった。メープルは殺人容疑で指名手配中のジョゼフ・マクグズィー、ハーデインの情婦として知られている。傍受記録にはこうあった。「午後三時三二分——メープルからウインピー(?)——ウインピーは今夜九時四〇分にバスで何者かが来るといつている。テープ録音」

「ウインピーというのは何者だ？」グレッグが尋ねる。

「初めて聞く名だ。殺人課に連絡しておいた」ジョージが言う。

グレッグが傍受記録を確認している間、ジョージは馬蹄形の中央にある回転椅子に戻った。その位置からだると一歩でどの再生装置にも手が届き、会話に事件性があると思われる時に横のテープレコーダーを瞬時に作動できる。

グレッグがテック12で立ち止まる。「ジョーンに進展は？」

「彼女の母親の電話があった。小児麻痺だ」

グレッグは唇を噛んだ。ジョーンは五歳、じき六歳になる。彼女の母親が毎朝友人に電話する様子はテック12で盗聴されている。グレッグはジョーンがおたふく風邪や水疱瘡にかかったり、幼稚園に通うようになったのを知っている。サンタクロースからキックスケーターを貰い、誕生日には子犬を贈られたのも聞いていた。

「ジョージが言う。「ついてないな」

グレッグは頷いてすばやく部屋を後にすると、四角いガラス張りのオフィスに向かった。彼のオフィスから盗聴室が見え、隣の同じく四角い部屋ではミス・カボットがテープ起こしをしている。

驚かせないようグレッグはノックした。彼女が振り返り、微笑んだ。

「テック10のはできているかい？」

「いま終わるところです」

グレッグは踵を返したがミス・カボットはしばらく彼の後ろ姿を眺めていた。長身瘦軀の彼の滑らかな身のこなしや、微笑みを湛えた気さくな話し方を、彼女は好ましく思っている。

午後一時五三分にオールド66が電話を傍受し始めた時、グレッグはジョージに呼ばれた。

オールド66は年季が入っているので甲高い音を出す。全員がその機器の動きを監視し、科学技術部の職員たちは真の愛情を注いでいる。オールド66が解決したのは殺人事件十七件、ゆすり三十三件、誘拐二件、強姦事件や加重暴行事件は数えきれない。実績は後ろの壁に貼ってある。

オールド66は現在、マルモ事件に当たっている——マルモというのはマローンという名前と、金絡みの犯罪を縮めた暗号名だ。オールド66はハリー・J・マローン宅の電話を盗聴している。マローンはザ・ロウにある企業の融資家で、海外取引のディーラーだ。アルゼンチン産の小麦を英国に、チリ産の銅を香港に売ろうとしている。

そのマローンにはザ・ロウでまったく知られていない副業がある。恐らく全米最大級規模で、巧妙にマネーロンダリングを行っているのである。

グレッグはかつてジョージに説明していた。「今回はうまくゆく。例えば、誘拐犯が身代金十万ドルをせしめるとする。犯人は警察がドル紙幣の通し番号を控えていて、使うと捕まると知っている——チャールズ・リンドバーグ誘拐・殺害事件でブルーノ・ハウプトマンがそうだったように。だから犯人はハリー・マローンのような盗金買受人を見つけ、きれいな金二〜三万ドルで手を打つと申し出る。そしてマローンは手に入れたばかりの十万ドルを海外取引につき込む。洗浄された金が全米に戻ってくる頃には、大勢の会計士や探偵を使わないと跡を辿るのは難しいはずだ。

奴らは決して満足しない。アル・カポネに融資していたシカゴの銀行家を見てみる。今じゃ大金持ちだ」

マローン自身は決して資金運用も取引もしない。警察にもその集団は知られておらず、盗聴で「ホーギー」なる人物が実動しているとかわからない。

そのホーギーがいま話している。「そう責めないでくれ……」

マローンの声はか細く整然としていて、ほとんど抑揚がない。「おれの言うことをよく聞くんだ

……」

グレッグは踵を返し、外の電話を取った。「警察だ。交換士長を頼む」

彼はほんの一秒待った。「ルーシーだな。グレッグ・エヴァンズだ。B O—八二七五六を逆探知してくれないか？」

グレッグは電話を切つて盗聴室に引き返した。指を忙しく動かす。

ホーギーが話している。「だから、奴らを止められないんだよ、ブリッツ。奴らはあのガキの面倒を見るつもりだ」

「どこへ？」

「さあな。たぶん同じ場所——サンデービーチだ」

「いつ？」

「おれの知ったことかよ、ブリッツ。たぶん今夜だろ」

「この件でおれが怒り狂つてると奴らに伝えてあるのか？」マローンが尋ねる。

「もちろん——言つたさ。だが奴らは、彼女を気にかけているのはふたりだけだと思つている。アパートの女家主と、働いている安酒場の主人だ」

「女子大生と言つてなかつたか」

「ああ——確かにそうだ。夜ウエイトレスをしている」

「気に入らないな」

「おれもだ——でもどうしようもあるまい？」

彼らが電話を切つた時に外の電話が鳴り、グレッグは驚きで心臓が飛び出そうになった。彼が受話器を取る。「ああ、ルーシー、わかつた。ありがとう」

グレッグたちは逆探知した電話回線について八分間話した。ホーギーなる人物が何者か、そしてホーギーは誰と話したのか。話した相手はサンデービーチで若い女性を殺すのだ。

グレッグは拳銃を確認し、腰の前に引つ張りコートを着ると、迅速に指示した。「殺人課に通報。ハーバーにパトカーを二台配備してもらおうようマックに頼んでくれ。そしてジョー・パッカーに連絡。五分でおれが迎えに行くと伝える」

グレッグはドア口で引き返した。「マックと話す時には気をつける。奴に盗聴していると気づかれるな。密告者からの情報だというんだ」

〔著者〕

ザ・ゴードンズ

ミルドレッド・ゴードンとゴードン・ゴードンの夫婦作家。
ミルドレッド・ゴードン。1905年、アメリカ、カンザス州生まれ。アリゾナ大学卒業後、教職、雑誌の編集に携わる。79年死去。ゴードン・ゴードン。1906年、アメリカ、インディアナ州生まれ。アリゾナ大学卒業後、リポーター、〈Tucson Daily Citizen〉紙の編集長、20世紀フォックス社の広報、FBIの対諜報活動員を務める。02年死去。

〔訳者〕

菱山美穂（ひしやま・みほ）

1965年生まれ。英米文学翻訳者。アンドリュウ・ガーヴ『運河の追跡』、パート・スパイサー『ダークライト』（ともに論創社）のほか、別名義による邦訳書あり。

とうちょう
盗 聴

——論創海外ミステリ 203

2018年1月20日 初版第1刷印刷

2018年1月30日 初版第1刷発行

著 者 ゴードン夫妻

訳 者 菱山美穂

装 丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論 創 社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1687-6

落丁・乱丁本はお取り替えいたします